

外国語活動に関する校内研究が教師の意識に及ぼす 影響に関する事例研究

—東京都A区C小学校の事例に着目して—

A case study on the influences of the In-Service Training about Foreign Language Activities on teachers' consciousness in an elementary school

—A case study on the teachers at “C” Elementary School, in “A” City, Tokyo—

中山 博夫
(Nakayama Hiroo)

Abstract :

The purpose of this study is to investigate the influences of In-Service Training about Foreign Language Activities on teachers' consciousness in an elementary school. “C” Elementary School is a common school. The teachers at the school common ones. They are not ones who speak English especially. Many of them feel poor for study of English and English conversation. But many of teachers at “C” Elementary School have a forward-looking approach, so the author decided to investigate the various factors about the in-service Training about Foreign Language Activities in the school. To this end I have researched seven teachers' consciousness changes which were affected by their in-service training at “C” elementary school. As a result, the author discovered that the teachers were affected by understanding of English class' communication principal, pleasure in English class and son on.

キーワード：外国語活動、小学校英語活動、意識の変容、校内研究

Keyword: Foreign Language Activities, Elementary School English Activities, consciousness change, in-service training in school

1. はじめに

平成23年度、日本全国の小学校で外国語活動（5・6年：年間35単位時間）が必修の活動として本格実施された。これは、小学校教育に質的転換を求める出来事だと考える。

本研究の目的は、外国語活動・小学校英語活動⁽¹⁾の校内研究が、小学校教師の意識にどのような影響を及ぼしているかを探ることである。この研究を進めることにより、外国語活動・小学校英語活動を、学校現場に無理なく定着させるための方法論を見いだすことができると考える。また、大学の教職課程教育における

外国語活動関連科目の指導方針にも示唆を与えるものである。

本研究を進めるにおいて、事例としては、研究指定を受けたような特別な学校ではなく、普通の小学校における校内研究・研修を取り上げることにした。研究発表を意識しなければならず、特別に予算が計上されるといった条件は、一般の学校にはない。そこで、一般のごく普通の小学校ではあるが、比較的順調に外国語活動・小学校英語活動の校内研究・研修が進んでいる学校を取り上げ、教師の意識について調査を行うことにした。

本研究の事例としては、東京都A区C小学校を選んだ。その理由を以下に説明する。A区教育委員会は、平成23年度の外国語活動の本格実施を前にして、平成21・22年度の2年間に、区内各小学校に30時間の研修を行うように指導した。また、平成22年2月には、小学校外国語活動指導資料を作成し、各小学校に配布した。C小学校では、A区教育委員会の指導を受けて、平成21・22年度の2年間、外国語活動を校内研究のテーマとして取り上げることを選んだ。筆者はC小学校のT校長から依頼を受けて、2年間に渡って校内研究の指導講師を務めた。C小学校は各学年がほぼ3学級の学校である。教師は、研究指定校のように特別な人事配置はされておらず、ごく普通の構成メンバーである。外国語活動の授業に対する不安はあるものの、外国語活動に対して比較的に向きの姿勢が、教師集団の中に育ってきていた。その要因を、校内研究との関わりを重視して、個々の教師の意識変容を精緻に探っていく中で明らかにしたいと考えた。

以上のような点から、外国語活動の校内研究が、教師にどのような影響を与えているかを探るために、C小学校を研究調査の対象とすることにした。⁽²⁾

2. 外国語活動に関連した研究の経緯

筆者は平成10年度から、小学校において実際に小学校英語活動の授業を行い⁽³⁾、授業原理の研究⁽⁴⁾、カリキュラム開発⁽⁵⁾を行ってきた。平成20年度からは、東京都内の10校ほどの小学校において、外国語活動の校内研究の指導講師を務めてきた。それらの学校において、筆者は外国語活動の授業について基本的な進め方を指導するとともに、塚本が指摘しているように、「子どもたちを当初から英語漬けにしてしまうのではなく、世界の多言語状況を認知させた上で、言語教育をするのが賢明」⁽⁶⁾という点についても指導してきた。また吉村が指摘しているように、小学校英語活動が「多言語・多文化主義や共生原理に基づく要請によるものとは考えにくい」⁽⁷⁾という点にもふれ、国際理解教育としての外国語活動・小学校英語活動を目指

して欲しいという指導もしてきた。

筆者は小学校教師と接する中で、多くの教師が外国語活動の授業を実施することに不安を抱いていると感じた。地域によっては、外部講師にほぼ頼った形で授業が進められている事例⁽⁸⁾もあった。そのような状況に鑑みて、筆者は外国語活動の指導法研究の必要性とともに、外国語活動を推進する教師集団を育成する研究の重要性を認識するようになった。そこで、教師集団のあり方に注目し、外国語活動が教師の意識にどのような影響を及ぼしたかを探る事例研究⁽⁹⁾を行った。本研究は、その延長線上にあるものであり、外国語活動に関する校内研究に焦点を当てた事例研究である。

3. 研究の手順と方法

研究の手順としては、まずC小学校の外国語活動・小学校英語活動への取り組みの現状、教師の意識の変容についての要因調査の観点を整理する。そのうえで、7名のC小学校の教師の意識について、インタビュー調査を行い、それを分析することにした。筆者は、個々の教師がどのような状況の中で、どのように自己を成長させるかを探るライフヒストリー研究に関心をもっている。今回のインタビュー調査は通常の世界調査の域をでるものではないが、ライフヒストリー研究を意識して、個々の教師の幼い頃からの生育過程と教師としての歩みを視野に入れて、個々の教師の語りの分析に重点を置いて研究を進めた。

調査にあたっては、山崎が指摘している教師の成長を支える契機、「どのような学校に赴任し、そこでどのような人物と出会ったかということが、その教師がその後どのような内容と質をもった力量を獲得していったかということを強く規定している」⁽¹⁰⁾という点と、「教師の日常の教育実践の遂行そのものが、その実践の担い手である教師の力量を豊かにするための経験になっている」⁽¹¹⁾という点を重要視した。山崎の指摘は、教師の成長にとって、学校の体制、同僚との関係、教育実践とが重要であるというものである。今回の調査は、それらの中でも教育実践を研究的に深めていく校内研究に重点を

置くことにした。

本研究は一事例研究ではあるが、研究の積み重ねにより、外国語活動を小学校の現場に無理なく定着させ、国際理解教育としての外国語活動の実践へ向けて一つの方向性は示すことができると思う。

4. 東京都A区C小学校の外国語活動・小学校英語活動への取り組みの現状

東京都A区ではALT（外国語指導助手、以後ALTとのみ表記する。）がALT派遣会社から派遣されており、多くの場合はALT派遣会社の作成したプログラムとALTに頼った授業が実施されてきた。そして前述したように、平成21・22年度の2年間で30時間の研修を実施するように、区教育委員会の指導があった。C小学校では、その指導を受けて、2年間の外国語活動の校内研究を実施することを決定した。校内研究に外国語活動を取り上げた理由は、「校内研究とは別に外国語活動の研修を実施することは負担が大きいから」と、校内研究の推進委員長であるCは語っていた。また、T校長は「先生方が自信を持って授業ができるようになって欲しい」と、研究開始の当初、筆者に語った。

平成21年度の校内研究のテーマは、「コミュニケーション能力を高める外国語活動の指導方法の工夫」である。小学校学習指導要領に沿って、コミュニケーション能力を重視したテーマである。そして、低・中・高学年の三つの研究部会に分かれ、部会で一つの学習指導案を作成して研究授業を行っていた。主な研究経過は以下の通りである。

- 4月：研究分科会（外国語活動推進に関する疑問点の洗い出し）
- 5月：講演「小学校外国語活動の授業原理とカリキュラム開発」（講師は筆者）
- 7月：研究授業（第5学年の授業、指導講評は筆者）、英語研修（講師はALT）
- 10月：研究授業（第1学年の授業、指導講評は筆者）
- 2月：研究授業（第3学年の授業、指導講評は筆者）

3月：研究全体会（まとめと課題確認）

研究授業までには、各研究部会の研究授業担当者以外も事前研究を行い、研究授業に向けての学習指導案の修正が行われた。

平成22年度の校内研究のテーマは、「英語に親しみ、楽しく学習する児童の育成」である。テーマ変更については、次のように述べられている。「コミュニケーション能力は外国語活動の学習だけでつくるものではなく、全教科の学習、友達との関わり等生活全般を改善していく中で身につけていくものと考えたからである」⁽¹²⁾と説明されている。コミュニケーション能力の育成を前提としながらも、英語への慣れ親しみと楽しい授業を重視しようとしたのである。主な研究経過は以下の通りである。

5月：研究全体会（研究主題の検討）

6月：講演「英語に親しみ楽しく学習する児童の育成」

（講師は筆者、アクティビティーの実技演習を含んだ講演）

7月：英語研修（講師はALT）

9月：研究授業（第5学年の授業、指導講評は筆者）

10月：研究授業（第1学年の授業、指導講評は筆者）

2月：研究授業（第3学年の授業、指導講評は筆者）

3月：研究全体会（まとめと反省）

前年度と同様に各部会において事前研究や学習指導案の検討が行われている。

筆者の指導講評では、授業そのものについての評価と改善点を述べるだけでなく、毎回、資料を準備し、外国語活動や国際理解教育等についてアクティビティーを交えた研修を、短時間ではあるが組み入れるようにしてきた。その内容は、外国語活動の目標（コミュニケーション能力の素地の育成）、外国語活動・小学校英語活動の授業原理、具体的な指導方法、総合的な学習と外国語、言語意識教育、国際理解教育等である。

5. 調査者の選択と意識変容の要因調査の観点 ごく普通の小学校の教師が、外国語活動・小

学校英語活動に対して前向きな姿勢を示すようになるためには、そのための意識変容の要因があるはずである。その意識変容の要因を、校内研究という視点を重視してインタビューを実施することにした。対象として7名の教師を選んだ。この7名は、高等学校までの教科としての英語に苦手意識を持っている4名（A、B、E、F）と、比較的苦手意識のない3名（C、D、G）とを選んでいる。教科としての英語に苦手意識のある者、比較的無い者を比較するための人選である。コミュニケーション能力の素度を育てるという外国語活動のねらいから考え、この二つのタイプを比較検討しようと考えた。

インタビュー内容は、外国語や異文化に対する意識、外国語活動・小学校英語活動に対する意識である。外国語活動・小学校英語活動の校内研究と関わって、教師の意識にどのような影響が及んでいるかを浮き彫りにしていきたいと考えた。

6. 東京都A区C小学校の7名の教師の意識変容

(1) 調査対象の教師

A：女性、41才 B：男性、30才
C：男性、61才 D：女性、53才
E：男性、27才 F：男性、29才
G：男性、35才

※ 年齢は調査時のものである。

※ インタビュー調査を行った教師には、事例掲載の了承を得ている。

(2) 調査内容と調査の留意点

調査対象の教師には、下記の事項についてインタビュー調査を行った。

- 小学生・中学生・高校生の頃の外国語学習や異文化についての思い出や意識
- 大学生の頃の外国語学習や異文化についての思い出や意識
- 教師になってからの外国語学習や異文化についての思い出や意識
- 小学校英語活動の授業が導入された当初に

思ったことや感じたこと

- 平成21・22年度に外国語活動の校内研究に取り組んできて、思ったことや感じたこと
- 研究会講師の指導や話で思ったことや感じたこと、それによって意識や行動に変化があったこと。
- これから外国語活動・小学校英語活動に、どのように取り組んでいきたいかについて思うこと

インタビューは調査対象の教師の発言をその場でノートに書き取りながら、ICレコーダーで録音した。その後、ICレコーダーの再生を基に、詳細なトランスクリプトを作成した。本論文内の事例は、そのトランスクリプトから分析資料としてまとめたものである。

(3) 調査対象の教師の意識変容

聴き取り調査の内容を整理したところ、以下のような特徴があった。そこで、その部分に下線と記号を付した。

- ・コミュニケーションを重視した外国語活動の授業に関すること
：(①-1)、(①-2)、(①-3)、……
- ・外国語活動の授業を楽しむ児童や教師に関すること
：(②-1)、(②-2)、(②-3)、……
- ・外国語活動推進のロールモデルに関すること
：(③-1)、(③-2)、(③-3)、……

【事例1：A（女性、41才、教職経験12年目）H23.7.26調査】

Aは、父親の転勤に伴って東京、九州地方、関東地方というように転居してきている。大学は東京都内にある社会福祉系の私立大学に進んだ。関東地方の都市YMCA勤務を経て、私立大学の通信教育で小学校教員免許を取得し、小学校教師になった。

中学校では、英語という教科が好きだったそうである。だが、高等学校では、英語に対して苦手意識を持つようになる。「高校生になると、本当にグラマーとリーダーと分かれて、何か、毎週英単語の、テストがあり、それがとても難しく、だいたい英語、高校生になるとちょっと

苦手意識がでてきたのかな」と語っている。しかし、英語運用能力に対して、「ああ、こう話せるようになりたいというのが、高校生になってきてからの方がずっと強かった」というように憧れのような気持ちを持っていた。

大学では、「外国語、英語は好きで、好きというか、やっぱり興味はあるんですけど、なかなかこう、ものにはできないという感じがしました」と語っている。興味と共に苦手意識が混在していたようである。

大学卒業後に勤務したYMCAは、ミャンマーのYMCAを支援していた。そのような職場で勤務する中で、「外国というの、今まではどちらかという、欧米の方に目がいった気がするんですけど、何かそういうアジアだったりアフリカだったりというふうの異文化だったり、外国だったり、というのを、その頃になって、身近になったような気がします」と、アジアやアフリカへの関心が高まったことを語っている。小学校教師になった初任校は、国際理解教育の校内研究に取り組んでいた。東南アジアからの研修員との国際交流も取り入れた実践が行われていた。ここでは、しばらく通級指導学級の担任をしており、小学校英語活動には関わってこなかった。

平成22年度に、AはC小学校に転任し、そこで初めて学級担任が行う外国語活動・小学校英語活動の授業を参観した。まだ、自分から進んで授業に取り組もうという感じではなかった。そしてEの授業を参観して、次のように感じている。「すごく、あのチャンツって、リズムに合わせて言うってのが、今までの私がALTの先生といっしょにやった、その授業とかでも、あんまりでてこなかった活動なので、ああこういうことで、英語の発音だったりリズムを体に染み込ませるといのは、こういう活動は子どもたちもすぐ乗れるし、ああいうのは、こういうのは英語活動に取り入れられているんだというのはいました」同僚の研究授業を参観し、その授業の進め方にロールモデルになるものを見つけているのである。(③-1)

また、外国語活動・小学校英語活動の授業を進める上で、学級経営が大切であることに気付

いている。「すごく外国語活動とか、子どもたちが、素の部分を見せてくれるというのか、見られるので、何かこう学級の中が風通しがいいと、子どもたちも気持ちよく声が出せる、何かそういう面では、こう気持ちよく恥ずかしがらずに声を出せる、活動を本当にクラスの子も子どもたちがみんなできるというのが、やっぱり学級づくりが大事かなと」と語っている。

そして、外国語活動・小学校英語活動がコミュニケーションの授業であることを強く意識している。「すごくコミュニケーション、英語活動で何か、コミュニケーション取ろうということ、を、すごく、意識して、今の授業は作ってこういう意図がある」と考え、「私たちが子どもの頃に受けた、英語とは、違うのかな」と感じている。(①-1)

そして、学級担任が主体となった外国語活動・小学校英語活動の授業をしてみて、普段の授業とは異なる意気込みで授業をしていることに気付いている。「英語の授業の時には、こう気持ちじゃなくて、切り替えてテンション上げてみたいな、ことをあのよく、C小の先生たちが話していた」と語り、それが「子どもたちが外国語活動に乗ってくる切っ掛けになったりする」と感じている。(③-2)

平成22年度の最後の研究授業の際に、筆者は国際理解教育の意図を持ってフォトランゲージ⁽¹³⁾を行った。家族をテーマとした写真集から内戦時のボスニアの家族を取り上げ、彼らが置かれた状況とその心情とについての話し合いを行った。さらに、8年後のその家族の状況を取材したビデオを視聴した。Aは、「すごく私の印象に残っているのは最後の回だと思うんですけど、何か写真を見せていただいて、ボスニアだったかな、あの写真を見ながらみんなで話をしたのが、すごく印象に残ってるんです」と語っている。そして、「ただ英語で楽しく学ぶということも大事だけど、何かそういう外国のことを知っていくというのも、外国語活動の中では、直接は授業の中でということはないのかもしれないけど…、でも、こうそういう視野を持っているというのは大事」だと感じている。

Aは「本当に外国語活動だったり英語活動

の、何か基本的なところが分かってない、まだ私は、分かりきっていないというところがある」と考えているが、今後について、「英語を話せるようになったり、いろんな外国の言葉って、外国、日本以外の外国の言葉を勉強してみたいなという、動機付けになるような授業ができたらいいなかな」とも考えるようになった。

【事例2：B（男性、30才、教職経験5年目） H23.7.26調査】

Bは東京都内で育ち、大学は関東地方の国立大学教育学部に進学し、造形教育について学び、小学校教師になった。

Bは教科としての英語に苦手意識を持っていた。「高校の授業や中学校の授業で、英語の外国語の学習となった時に、個人的にもすごく単語を覚えなきゃいけないとか、文法も覚えなきゃいけないという意識があって、個人的にはとても苦手としていました」と語っている。大学受験でも、「まあ最低限の点数が取ればいいかなという意識」だったそうである。

大学生になっても苦手意識は続いている。「外国語、言語に対して苦手意識が、ずっとあったんで、多分大学時代とかに、海外、未だに海外旅行したことがない、こう海外の風景とか、あの、世界遺産だとか、ああいう物に興味はあるんだけど、何かどうしようかな、まあいっかなと思ってしまうのは、言語に対して苦手意識があるからかな」と感じている。

小学校教師になり、外国語活動・小学校英語活動と直面した時、Bは「一番最初はめんどくさいなと正直思った」と言う。そして、「外国語とか英語活動が重要なのは分かるんだけど、日々子どもたちに教えている中で、国語とか算数とかも全然能力が足りていないし、もっと付けなきゃいけないなというを思っている中で、時間が減って外国語にわざわざ当てなきゃいけないのは、いけないほどの重要性があるものなのかなあ」と考えていた。また、「導入され始めた時が私が3年生で、3年4年とすごく国語の新出漢字も多く、内容もすごくたくさんあるんで、子どもたちがまだまだ幼い文章書いていたり、国語の読み取りで困っている中で、日本語

もおぼつかないのに、外国語なんてなと思っていました」とも語っている。「英語活動はなるべく避けて避けて」ということが、彼の思いであった。

外国語活動・小学校英語活動の校内研究が始まり、筆者が学校を訪問するようになった。Bは、「文法や単語として、今まで僕が苦手としていたようなテスト勉強のような形で教えなきゃいけないんじゃないんだ」と、筆者の指導の中で気付いていった。(①-2)そして、「子どもたちがいかにこうコミュニケーションしたり、意見を楽しんで言える、言ったり表現したりは、できるようになるかなというのを、考えるようになって、それを考えるのは楽しかった」と思うようになっていった。(①-3)また、「子どもたちはどれだけ楽しめるか、この活動だったら子どもたちは活動的にできるよな」と、外国語活動・小学校英語活動に対する意識が大きく変化している。

平成21年度、Bは先輩教師であるMやNの研究授業を参観し、「M先生、N先生というのは、やっぱり、どちらも指示まで英語で通していたお二人なので、とてもこう自分も頑張らなきゃなという、意識が強かった」と語っている。(③-3)そして彼は、担任していた4年生の学級で、「外国語活動をやる時は必ず私が変装をして、全く別の先生が来るからねって、言って、違う服装に替えてきて、あのお眼鏡も違う眼鏡に替えて、ていうふうにやって、いつもと違う空間にして、全然違う楽しみ方しよう」と、小学校英語活動の授業を楽しむようになっていった。(②-1)

平成22年度にはTの研究授業を参観して、「他のクラスよりもすごく活動的で、そういう雰囲気の日頃から持っていけるT先生の指導とか学級づくりってのが、すごい」というように、学級経営との関わりにも目を向けている。(③-4)そして、筆者の指導を受けながら校内研究に参加する中で、Aは「自分が嫌いな英単語の授業じゃないんだな、とにかく研究の2年間で目から鱗だった」とも語っている。(①-4)

【事例3：C（男性、61才、教職経験38年目、定年退職後再任用2年目）H23.7.27調査】

Cは都内の私立大学の社会学部を卒業して、小学校の事務職として就職した。担任が欠勤した時などに、学級補助をしていた。そこで、小学校教師という仕事に魅力を感じ、働きながら、都内私立大学の通信教育で小学校教員免許状を取得して、小学校教師になった。平成20年度末で一旦定年退職しているが、再雇用され、学級担任を務めると共に校内研究推進委員長も務めている。

Cは中学校、高等学校では外国語についてはあまり記憶に残ることはないそうだが、大学ではシェークスピア等を原書で読んでいたということである。マルクスの資本論も英訳で読んでいたそうだ。英語への苦手意識を感じていないように思われる。

平成10年の学習指導要領改訂で、総合的な学習の時間の中で小学校英語活動が実施されるようになった時、Cは「僕の場合は違和感なく、これからの時代必要なんだろうな」と思ったと語っている。また、「英語に慣れ親しむというのは、自分たちがこれから成長していくのにすごく大切なことになるだろう」とも思ったそうである。だが、自分が小学校英語活動の授業に取り組むということはなかったそうである。だが、Cはそれまでの教師人生の中で、東京大学の教育学教授の研究会に参加するなど、研究熱心な一面があった。

2年間の校内研究については、ゲームやチャレンツがあり、「リズムとか感情を伴う、あの研修はすごくいいなと思いました」と語っている。さらに授業の中で子どもたちについて、「他の授業と違ってノリノリになるんですね、喜んで」とか、「ジャンケンをやると時に、“Rock, scissors, paper, one, two, three.”てやってくれるんで、ああいうの、結構、子どもたちの中に、英語に対しては抵抗がなくなった感じがします」とも語っている。生き生きと活動する子どもたちの様子を見て、それを肯定的に受けとめているのである。(②-2)

また、研究推進委員長として、「授業のパターンを、パターン化というか、それぞれの形が、

それなりに先生方、理解することができた」、「借り物じゃなく、自分たちの学校の実情に合わせた、借り物じゃない自分たちで使える年間指導計画が立てられた」と、研究成果を評価している。さらにC小学校の教師の意識の中で変わったものとして、「自分の英語の発音を恐れなくなった」ことを、一番に挙げていた。これは、外国語活動・小学校英語活動の授業がコミュニケーション能力の育成を重視したものだということが理解されてきたことによると考えた。(①-5)

筆者の指導については、フォトランゲージが印象的だったようである。「各国が抱えている問題などを、身近なものというんですか、他人事ととらえずに、やっぱり同じように生きていく、地球の裏側のことだけど、すごく大事なことだと、人の営み、そういうこと全てひっくるめて、より深い関心、関心が付いてきたと思う」と語っている。

そして、食文化などの体験を取り入れた授業等の新たな授業のアイデアについても語ってくれた。

【事例4：D（女性、53才、教職経験32年目）H23.8.1調査】

Dは東京都内で育ち、中学校から都内キリスト教ミッションの私立学校に進み、同系列で大学まで進んでいる。大学は文学部教育学科で学び、そこで小学校教員免許状を取得し、小学校教師になった。

進学した私立中学校では、「下から来た子とか、ミッション系なので、英語ペラペラにしゃべる子が周りにいて、カルチャーショックでした」と、Dは語っている。そして週1回の英会話の授業について、「外人の先生が来て英語だけで授業するんだけど、何か全く分かんなかった」、「苦手意識があった」と述べている。また、毎日の礼拝やクリスマス礼拝などのキリスト教文化に接し、ボランティア活動にも参加する中学時代であったそうである。

高等学校の英語の授業は、「高等部に来た子、受験勉強をして来た子に合うような英語の授業」だったそうである。英語の成績が悪かった

と意識しているが、「10段階のうち7、他のはみんな、8か9か10だったんだけど、担任の先生に7を退治しなさいと言われて、最後には9にはなった」というのだから、かなり高水準だったことが分かる。また、「世界史がすごく好き」で、「外国に対する憧れみたいのがすごくあって、何か高等部の時に美術史を習った時に、エジプトも絶対行ってみたい」と思ったなどと、「海外の文化に憧れました」と語っている。

大学の卒業時にヨーロッパ旅行をしている。「21日間くらい、7カ国10都市、ずっと友だちと3人でツアーに申し込んでまわって、その時、英語、英語本当にしゃべれないなあ」と思ったという。だが、美術史で憧れた美術館などを巡り、たいへんに楽しい思い出になったようである。その思い出を熱く語ってくれた。教師になってからも、個人的に海外旅行は楽しんでおり、旅行中に必要に迫られ、英語でコミュニケーションを図ることはあったそうである。

総合的な学習の時間の中で小学校英語活動が始まった時、「字できない子がいっぱいいて、日本語もちゃんと話せない子がいっぱいいて、それで英語というのは、何か、こう無理」と感じている。また、「教える私たち自身が、英語、あのう英語の勉強して先生なった訳じゃないので、ううん自分が教えるってのも難しいな」とも思ったそうである。そのような感覚で10年近くの時間が流れてしまった。

平成21年度にC小学校に転任し、初めて自分で外国語活動の授業に取り組むことになった。5年生の担任をしていたが、学級経営がうまくいかず悩んでいた。授業は「本当にCDかけて、あのテキストを見てやったのが精一杯」だったそうである。また、「先生のお話にもあったように、あのコミュニケーション、学級経営なんだ、ほんとにそうだなと思うんですけど、そこがうまくできなかったから、ほんとに英語の授業もできなかったという感じ」だとも語っている。(①-6) 彼女は、当時の学級の状態について、「いじめの問題もあって、ほんとううまくいかなかったんで、英語活動やろうとして3人グループ、2人グループなってと言った時に、本当にうまくいかなかった、クラス全体がギク

シャクしてしまっていた」と、授業をうまく進めることができない状態であったことを語ってくれた。校内研究に参加してきて、「英語活動ってのがコミュニケーション能力を育てる、そこを、それを作るものというのは、何となく分かって、いや遅まきなのですが、やっと分かってきた」と語っている。(①-7)

現在は1年生の担任をしているが、「英語をやるために、ゲームをやるんじゃないで、普段からゲームをやっていて、その中で自然と英語が出てくるようなのがいいのかな」と思いながら、小学校英語活動に取り組んでいるそうである。

【事例5：E（男性、27才、教職経験6年目） H23.8.1 調査】

Eは東京都で育ち、関東地方の私立大学の教育学部で理科教育を学び、小学校教員免許状を取得し、小学校教師になった。

中学1年の時は、英語という教科が「すごく楽しくて、英語を一生懸命頑張った記憶がある」そうだが、「2年生の時に先生が替わってしまって、たまたまその先生と自分が、その反りが合わなくて英語が嫌いになって」しまったそうである。「文法とかなってくるとうごく複雑になってくるので、その辺りで、まあ挫折したというのもあるし、あと英単語をたくさん覚えなければならないのに覚えきれなくて、自分の中で何か暗記教科みたいなものなんだという頭になってしまって、それで英語が苦手になってしまった」と回想していた。高等学校でも苦手意識は続き、「大学に入学するための、教科の一つ」と思っていたそうである。大学時代には、アルバイト先の飲食店で外国人に話しかけられたが、全く理解出来なかったそうである。「その時に自分が今まで学習してきた英語は、あんまり英会話に向いてなかったし役に立たないなとすごく感じた」と述べている。

小学校教師になってからは、学校を訪問してくるALTと関わるようになっていった。「外国人の先生と、授業も見させていただいたし会話する機会もあったので、そこで自分もなるべく積極的に、そのう外国人のALTの先生と話す

ようにして、「向こうが何を言おうとしているかほんの少し分かるようになった」そうである。「割と前向きに積極的に話ができるようになったかなあ」と感じている。

外国語活動の校内研究が始まり筆者の指導を受け、「コミュニケーション能力を高めるのが大事だというお話を伺って、なので僕は英語ってのを一つの媒体にして子どもたちがクラスの中でいろいろコミュニケーション取れるようになって欲しいなって意識で、授業は組み立てて」いったそうである。(①-8)「たくさん教わったゲームや自分で調べたゲームなんかを使って、そこから英語を話せるようなゲームを使って」、授業を組み立てたということである。

そして研究授業を進める中で、以下のように感じたそうである。「一番の良かったのはクラスの中でもなかなか自分から関わりが持てないような子どもも何人かいたんですけど、その英語の授業を通して、ゲーム或いはいろんな子と会話するチャンスがあったので、その子たちが自分の方から行かなくても周りから話しかけてくれるってので、授業の中でそういう子たちもいろんな子たちとコミュニケーション取れたのが、すごく僕の中では印象的」と語っている。また、「子どもたちのコミュニケーションの力が育っていくのが、伸びていくのが、見れたのがすごく英語活動、外国語活動の意味のあるところだなと感じ」ている。(①-9)

Eの研究部会には地方からの転入者がいた。その教師は、前任校が外国語活動の研究指定校であった。Eは、その教師から授業の組み立て方についてアドバイスを受けている。研究授業の学習指導案も、そのアドバイスを従って作成したそうである。(③-5)

筆者の指導を受け、以前は「英語を教えるという感じ」だったが、「英語を教えるというよりは、子どもたちのコミュニケーション能力を育てていくのに英語を使っていくというようなスタンスでいいんだ」ということを知ったので、そこが一番の意識の変化になりました」と語っている。(①-10) 校内研究をしていなければ、「すごく英語苦手意識持ったまま、どうなったんでしょうね、きっと何をやって良いのか分か

らない状態で、まあ適当と言っちゃ言葉が悪いんですけど、自分の中でののが絞れていないまま、授業をやっていた」のではないかと感じている。

そして、「英語の授業やってきてすごい楽しかった」、「苦手意識、嫌だな、嫌だな、英語始まるんだと思っていたのが、それがもっと楽しくやっていいんだというイメージに変わったのは、自分にとってすごくプラスに」なったとも語ってくれた。(②-3)

【事例6：F（男性、29才、教職経験5年目） H23.8.2調査】

Fは東京都内の私立大学法学部を卒業し、中学校社会・高等学校地歴・公民の教員免許状を取得している。その後、東京都内の私立大学の通信教育で小学校教員免許状を取得して、小学校教師になっている。

英語という教科について、「中学の時はすごい得意だった」そうだが、「高校に入って、その文法がすごく複雑になって、どんな時にこれを使えばいいんだというように、その何でしたっけ、分詞構文とか、何か捻くれた考えかもしれないですけど何か、あの大学受験とかで結局バツをつけるためだけに、難しい文法をわざわざやっている気もして、ちっとも勉強しなかった」ということである。「現実離れした文法教わっても、うんテストのための勉強になってしまっ、やる気がおきなかったかなあ」とも語っていた。

高等学校の修学旅行でハワイに出かけている。そこで、「ハワイで実際食べ物買うとかバスの乗り場を訊くとか、そういう状況になって、初めて、何とかして、正しい英語じゃなくても、とにかく何とかして、自分の意思を伝えなきゃいけないんだという、うん必然性というか、必要性というのかな、必要性を感じ」たそうである。

大学では、「私がいままで好きじゃない英語Ⅰとか英語Ⅱの授業とるより」もよいという理由で、会話等の活動の多い外国人講師の授業を履修したそうである。

外国語活動の校内研究に参加する中で、「英

語の授業を自分がやることに対してはそんなに昔ほど抵抗はなくなりました」と語っている。また、「子どもが英語楽しいって、いうふうに思うことを、まあ一番に考えてするようにはしました」とも語っている。(②-4)そして、「多分、小学校で結局スキルの英語を学んでいくと、私も英語嫌い増えるんだろうと思う」、「私は中学校は好きだったけど、高校で嫌いになって、何かもう半分聞いてなかったんで、それが早くなると思う」とも語っている。さらに、「外国語活動という、学校の一つの授業について、楽しく取り組めるようになった」、「われわれが楽しいから、子どももやって楽しいと思う」というように、外国語活動・小学校英語活動に対して肯定的な意識を持つようになっている。(②-5)

【事例7：G（男性、35才、教職経験13年目） H23.8.2調査】

Gは地方出身で、地方の国立大学教育学部を卒業し、その地方の小学校教師になった。平成21年度にC小学校に転入した。地方の前任校は、外国語活動の研究指定校だった。

Gは中学校の英語は得意だったと語っている。高等学校では、「覚えることが大変増えまして、ちょっとしんどいなといった感じ」であり、「中学校の頃ほど得意だなとか好きだなといった感じではなかった」そうである。大学では1、2年で単位修得した後は、英語に縁がなかったそうである。

地方で小学校教師になり、2校目の学校が外国語活動の研究指定を受けた。その中で、「英語活動をするということが、割と学級づくりに影響するとか、ええっと、まあ朝、毎週朝に、やったりとか、その週1回やるかやらないかぐらいですけど、それぐらいやっていると何か雰囲気はよくなる、まあ学級がまとまってくる感じがする」と語っている。

C小学校に転入し、校内研究に参加するようになる。彼は、「英語使って子ども同士がコミュニケーション取ったりとか、コミュニケーション取りながらゲームを楽しんだりとか、まあそういう要素が強い方が楽しいんじゃないかなと

言うか、楽しんでやれる」という考えで取り組んでいる。(①-11) (②-6) 筆者の指導を受け、「お話を聞きながら、そうだよなと思って聞いてたんで、僕は割と違和感無かったですけど。だから、すいません、割とそうですよねって聞いていました。まあ、変化があったかという、変化はあまりないんです」と語っている。Gの場合、研究指定校である前任校での校内研究の経験が大きな意味を持っていた。

7. 6名の小学校教師の意識変容の事例から見たこと

今回の7名の小学校教師への意識調査の目的は、外国語活動・小学校英語活動の校内研究に取り組むことが、小学校教師の意識にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることである。

この7名は二つのタイプのグループに分けることができる。一つは、学校教育の中で「英語」という教科に苦手意識を持つA、B、E、Fのグループである。もう一つは、比較的苦手意識を持たないC、D、Gのグループである。両者に共通していることは、外国語活動・小学校英語活動の授業に対して肯定的な姿勢を示していることである。

6名の小学校教師の意識変容の分析に際し、前章と同様に三つの特徴について、その部分に下線を入れ、以下のように記号を付した。

・コミュニケーションを重視した外国語活動の授業に関すること

：(①-1)、(①-2)、(①-3)、……

・外国語活動の授業を楽しむ児童や教師に関すること

：(②-1)、(②-2)、(②-3)、……

・外国語活動推進のロールモデルに関すること

：(③-1)、(③-2)、(③-3)、……

A、B、E、Fの事例の方から検討してみよう。

Aは中学校から大学まで、一貫して英語に対して興味を持っていたのだが、高等学校で学習の難易度が高まるにつれて苦手意識が増していった。

Aは校内研究の2年目にC小学校に転任して

いる。授業実践に対しては消極的であったが、外国語活動・小学校英語活動が、「子どもの頃に受けた、英語とは違う」ことに気付いていった。それが、コミュニケーションを重視した活動であることを、体験的に理解していったのである。(①-1) また、外国語活動・小学校英語活動の授業では、子どもたちが自然な地の部分の姿を見せることに気付き、外国語活動の授業を行う時には、学級経営が良好でなければ、児童をコントロールしづらいと考えるようになっていく。また、チャンツやリズムを重視した、同僚Eの授業がロールモデルになっている。(③-1)

つまり、同僚の授業を参観したり、学習指導案を検討し自分で授業を試みる中で、自分の英語学習の経験とは異なる、コミュニケーション重視の授業に価値を見出すようになっていったと考える。(①-2) そこには、ロールモデルになる同僚やその授業が介在しているのである。(③-2) また、フォトランゲージなどの国際理解教育の研修が、授業に対するAの視野を広げたことも分かった。

Bは中学校から大学に至るまで、一貫して英語に対して苦手意識を持っていた。外国語活動が導入されても、「英語活動はなるべく避けて」という否定的な意識であった。

だが、校内研究に参加する中で、コミュニケーション能力の育成を重視した授業であることに気付いていった。(①-3) そして、「子どもたちはどれだけ楽しめるか、この活動だったら子どもたちは活動的にできるよな」と、否定的であった意識が肯定的へと変化している。(②-1) これは、子どもたちと共に外国語活動・小学校英語活動の授業を楽しんでいることに要因があると考える。(②-2)

そして、MやNの英語のみを遣った研究授業が一つのロールモデルになり、「自分も頑張らなきゃな」という意識がもたらされている。また、Tの研究授業や学級経営もロールモデルとなり、Bに影響を及ぼしていった。(③-3) 身近な同僚が新しい課題に挑戦している姿、その実践の内容は、教師の意識に大きな影響を及ぼす要因の一つであると考える。(③-4) Bの

「研究の2年間で目から鱗だった」という言葉が物語るように、Bの視野は大きく開かれた。

Eは中学1年までは英語が好きだったそうである。中学2年になって英語が嫌いになり、苦手意識が大きくなっていった。

校内研究に参加する中で、Eもコミュニケーション能力の育成を重視した授業であることに気付いていった。そして、「子どもたちのコミュニケーションの力が育っていくのが、伸びていくのが、見れたのがすごく英語活動、外国語活動の意味のあるところだ」と感じている。(①-4) また、「苦手意識、嫌だな、嫌だな、英語始まるんだと思っていたのが、それがもっと楽しくやっていいんだというイメージに変わった」とも意識している。これは、事実として子どもたちのコミュニケーション能力が育っていること、授業を楽しめたことに要因があると考える。(②-3)

Fは中学までは英語が得意だったそうである。高等学校では英語が嫌いになり、学習意欲が低下している。英語を学ぶことの意義にも疑問を持っていた。ハワイへの修学旅行において、コミュニケーションの手だてとしての英語の必要性を感じるようになっていく。

校内研究に参加する中で、5年生・6年生の子どもたちと、「われわれが楽しいから、子どももやってみようと思う」というように、外国語活動の授業を楽しんでいる。(②-4) このような肯定的な意識に変わっていった要因は、コミュニケーションを重視した授業を、子どもたちと楽しむことができたことだと考える。(②-5)

A、B、E、Fは、学校教育の中で英語に苦手意識を持ったり、嫌いになったりしていた。この4人は、外国語活動・小学校英語活動に直面した時、消極的であったり否定的であったりしている。佐藤は、「新任教師自身が子どもとして体験した一二年間に及ぶ学校生活の経験は、教職生活の出発に、ある保守的な生活をもたらす原因になる」⁽¹⁴⁾と指摘しているが、この指摘から考え、4人の意識が消極的であったり否定的であったりしていたことは首肯できるものである。だが、外国語活動・小学校英語活動の

授業がコミュニケーションを重視するものであることを実感したり、子どもたちと授業を楽しんだりする中で、彼らの意識は肯定的なものに変わってきている。また、ロールモデルになる同僚やその実践があることも大きな影響を及ぼしたことも分かった。(①-5) (②-6) (③-4)

では、C、D、Gの事例を検討したい。

Cのインタビューからは、英語に対する苦手意識を見つけることができなかった。総合的な学習の時間において小学校英語活動がスタートした時にも、「これからの時代必要」と感じている。そして校内研究を進める中で、授業を楽しむ子どもたちの姿に満足している。(②-7) また、校内研究の推進委員長として、同僚教師が授業の方法論を身に付け、カリキュラムを作成していく姿にも満足している。これらは、彼の研究に対する熱心な思いが満たされたことによると考える。そして、フォトランゲージによって、広い視野から外国語活動・小学校英語活動をとらえるようになっていく。

Dは、中学校・高等学校で他の教科に比べ英語の成績が悪かったと感じているが、成績は全体的に高レベルであり、苦手というレベルではないと考える。ただ、英会話には苦手意識があったようである。しかし、海外旅行を重ねるうちに、旅行に必要なコミュニケーションは英語で取れるようになっていく。

総合的な学習の時間において小学校英語活動がスタートした時には、否定的な気持ちを持っていた。C小学校で校内研究が始まる年に転任してきて5年生の担任になったが、学級経営がうまくいかず苦しんでいる。校内研究に参加して、授業推進における学級経営の重要さと外国語活動・小学校英語活動がコミュニケーション能力育成を重視していることには気付いている。(①-6)

Gは中学校で英語が得意であった。高等学校においても苦手ではなかった。大学では1・2年の外国語科目の単位修得をした後は、英語には全く無関係の学生生活をしている。小学校教師になって2校目の学校が、外国語活動の研究指定を受け、外国語活動の研究開発に従事して

いた。その時に、外国語活動が学級経営に寄与すると認識するようになった。C小学校では、コミュニケーションの授業を楽しむという意識で過ごしてきたようである。(①-7)

C、D、Gは比較的に英語に対する苦手意識がない教師である。Cは楽しく活動する子どもの姿や積極的に研究活動に取り組む同僚の姿に満足している。Dは外国語活動・小学校英語活動の授業がコミュニケーション重視であることはつかんでいるが、それを自分の実践として進めることには積極的とは言い難い状況である。Gは研究指定校の経験を生かし、比較的に余裕のある2年間を過ごしたようである。

7名の教員の意識変容を事例として取り上げ、英語に対して苦手意識を持っているグループと、比較的に苦手意識を持っていないグループに分けて検討してきた。校内研究に参加する中で、意識が大きく変わったのは苦手意識を持つグループの方であった。意識変容の要因は、外国語活動・小学校英語活動の授業がコミュニケーション重視の授業であることを体験的に理解したこと、子どもと授業を楽しんだこと、ロールモデルがあったことであった。(①-8) (②-8) (③-5)

比較的に苦手意識のないグループでは、大きく意識に変化があった訳ではない。だが、コミュニケーションを重視した授業で、子どもたちといっしょに活動を楽しんだという経験が肯定的に評価されていることは確かである。(①-9) (②-9)

8. おわりに

C小学校の教師の意識変容の調査における変容の要因は、以下のようにまとめることができる。なお、6章と7章との対応部分を記号によって示す。

① 外国語活動・小学校英語活動がコミュニケーション能力の育成を重視していることが体験的に理解されること

6章：(①-1) (①-2) (①-3) (①-4) (①-5) (①-6) (①-7) (①-8) (①-9) (①-10) (①-11)

7章：(①-1) (①-2) (①-3) (①-4)

- (①-5) (①-6) (①-7) (①-8)
(①-9)
- ② 外国語活動・小学校英語活動の授業を子どもたちと楽しめること
6章:(②-1) (②-2) (②-3) (②-4)
(②-5) (②-6)
7章:(②-1) (②-2) (②-3) (②-4)
(②-5) (②-6) (②-7) (②-8) (②-9)
- ③ 外国語活動・小学校英語活動の授業の身近なロールモデルがあること
6章:(③-1) (③-2) (③-3) (③-4)
(③-5)
7章:(③-1) (③-2) (③-3) (③-4)
(③-5)

上記のような要因が機能するためには、以下のような校内研究・研修を行うべきだと考えている。それを提案したい。

- ① コミュニケーション重視のアクティビティの理論的・体験的研究・研修
校内研究では、英語のスキルではなく、コミュニケーションが重視されていることの理論的な研修を、『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』や外国語活動に関する研究書に基づいて行う。さらに、英語や日本語を用いたコミュニケーション活動のアクティビティを体験的に学ぶ。外国語活動の実践論に関する多くの図書や、多田孝志の共創型対話論に関する図書が参考になる。
- ② 楽しい外国語活動・小学校英語活動を目指した授業研究の継続
まずは、外国語活動を難しく考えず、児童と共にゲームを楽しむといったところから授業研究を始め、児童が楽しく活動できているかどうかを観点の一つに組み入れた授業研究を継続する。
- ③ 外国語活動・小学校英語活動の授業実践者としてのロールモデルの育成

外国語活動に関する研究会を公的に設置し、そこで外国語活動の授業研究を行う。研究会で研修を重ねた教師が、それぞれの職場でロールモデル、または指導的な立場になっ

て、外国語活動の校内研究を行う。

以上の提案が参考になり、多くの小学校において外国語活動の校内研究が大きな成果を上げ、外国語活動が小学校現場に無理なく定着することを期待している。

また、昨年度の東京都A区B小学校に着目した事例研究において、筆者は「外国語活動が、小学校現場に無理なく定着するためにも、B小学校の例にあるように、支え合う職場の仲間による自由な対話と協同的な研究活動を大切」⁽¹⁵⁾という結論を得ている。全国の小学校が、職場の集団と校内研究とを重視して、外国語活動・小学校英語活動を推進することを願ってやまない。

【註】

- (1) 平成10年の小学校学習指導要領の総合的な学習の時間における外国語活動を小学校英語活動と表記している。また、平成20年度の小学校学習指導要領の外国語活動は5・6年のみの活動であるため、1年～4年で外国語活動を実施する場合には、小学校英語活動と表記することにした。
- (2) C小学校は、次のような教員構成であった。平成21年度、22年度ともに、校長1名、副校長1名、学級担任23名、少人数指導1名、専科3名、養護教諭1名である。外国語活動・小学校英語活動を推進するための特別な人事配置はなく、ごく普通の小学校である。ただ、愛知県豊田市から転入した教師は、豊田市で外国語活動の研究指定校での勤務経験がある。
- (3) 中山博夫 「異文化を楽しむ児童を育てる3年生の実践—アメリカ人児童と共に活動する学級活動と小学校英語を通して—」、日本国際理解教育学会『国際理解教育』VOL5、(創友社、東京)、pp.54-58、(1999)
中山博夫 「英語に慣れ親しむ児童を育てる指導—英語の歌やゲームを楽しむ活動を通して—」、愛知県名古屋市千種区・名東区帰国子女教育推進協議会『平成10年度帰国子女教育研究報告書』第16集、(名古屋)、pp.23-24、(1999)
中山博夫 『『世界の遊びクラブ』学習指導案』、国際理解教育同好会『国際理解教育同好会誌 平成11年度国際理解教育同好会研究集録』、(名古屋)、pp.69-109、(2000)

- 中山博夫 「色についての英語を楽しもう」、国際理解教育同好会『国際理解教育同好誌 平成12年度国際理解教育同好会研究集録』、(名古屋)、pp.21-25、(2001)
- 中山博夫 「動物についての英語を楽しもう!」、名古屋市教育委員会『小・中学校における国際理解教育の手引』、(名古屋)、pp.62-63、(2003)
- (4) 中山博夫 「国際理解教育の本質と新学習指導要領における方向性」、国際理解教育同好会『国際理解教育同好会誌 平成12年度国際理解教育同好会研究集録』、(名古屋)、pp.57-60、(2001)
- 中山博夫 「小学校英語活動」、国際理解教育同好会『やってみよう! 国際理解教育 平成14年度国際理解教育同好会研究集録』、(名古屋)、pp.21-24、(2003)
- 中山博夫 『江戸川区立一之江第二小学校研究会資料 小学校外国語活動の授業原理とカリキュラム開発』、(東京)、pp.1-15、(2009)
- 中山博夫・多田孝志 「外国語活動と国際理解教育」、日本国際理解教育学会『グローバル時代の国際理解教育 実践と理論をつなぐ』、(明石書店、東京)、pp.220-225、(2010)
- (5) 中山博夫 「小学校英語活動カリキュラム」：第5学年、第6学年用に年間18時間「小学校英語活動カリキュラム」を作成した。各月にテーマを設け、言語材料とアクティビティの例を示した。さらに、18時間の授業展開例も付けてある。
- 中山博夫 「小学校英語活動のカリキュラム開発」、日本国際理解教育学会『日本国際理解教育学会 第16回研究大会 研究発表抄録』、(岐阜)、pp.54-55、(2006)
- (6) 塚本美恵子 「Language Awareness (言語意識教育) による国際理解の育成」、日本国際理解教育学会『国際理解教育』VOL 8、(創友社、東京)、p.12、(2002)
- (7) 吉村雅仁 「多言語・多文化共生意識を育む小学校英語活動の試み」、帝塚山学院大学国際理解研究所『国際理解』36号、(大阪)、pp.186-196、(2005)
- (8) 名古屋市教育委員会は、小学校英語活動の授業を推進するための日本人講師である「英語活動アシスタント」を雇用し、市内の各小学校に派遣してきた。授業は、多くの場合、「英語活動アシスタント」が主導して進められていた。名古屋市教員組合の平成22年における一番の要求事項は、「英語活動・外国語活動アシスタント」に関する予算であった。名古屋市教育委員会は、教員組合の要求を受け入れ、平成23年度には第5学年・第6学年の年間35時間のすべての外国語活動の授業に、「英語活動・外国語活動アシスタント」を配置した。東京都A区の場合も、ALT派遣会社が派遣するALTが主導する授業が多いのが実態であった。
- (9) 中山博夫 「外国語活動の教師の意識に及ぼす影響に関する事例研究—東京都A区B小学校の事例に着目して—」、目白大学『目白大学総合科学研究』第7号、(目白大学、東京)、pp.47-59、(2011)
- (10) 山崎準二 「第三章 教師としての成長を支えるもの」、稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編『教師のライフコース』、(東京大学出版、東京)、p.79、(1988)
- (11) 前掲書、p.79
- (12) 江戸川区立一之江第二小学校 「2主題設定の理由」、『平成22年度校内研究紀要 英語に親しみ楽しく学習する児童の育成』、(東京)、p.3、(2011)
- (13) 1枚の写真を読み解き、いろいろと気付き発見させるための参加型アクティビティーである。
- (14) 佐藤学 「教師の生活世界へ」、『教師というアポリア[反省的实践へ]』、(世織書房、横浜)、p.306、(1997)
- (15) 中山博夫 「外国語活動の教師の意識に及ぼす影響に関する事例研究—東京都A区B小学校の事例に着目して—」、目白大学『目白大学総合科学研究』第7号、(目白大学、東京)、pp.47-59、(2011)